令和４年度 兵庫県・神戸市調整会議　議事録

令和４年12月20日（火）14時00分～15時30分
兵庫県公館大会議室

出席者：（県）齋藤知事、片山副知事、服部副知事、小西県議会議長、水田県議会副議長、
遠藤防災監兼危機管理部長、八尋技監、小橋新県政推進室長兼総務部長、
梶本企画部長、稲木財務部長、生安福祉部長、山下保健医療部長、
竹村産業労働部長、萬谷農林水産部長、菅環境部長、杉浦土木部長、
西谷まちづくり部長、大久保神戸県民センター長
（市）久元市長、今西副市長、油井副市長、小原副市長、安井市会議長、
坊池市会副議長、増田市長室長、辻企画調整局長、西尾行財政局長、
加藤文化スポーツ局長、花田健康局長、福本環境局長、大畑経済観光局長、
林建設局長、山本都市局長、河原港湾局担当局長（空港担当）

【齋藤知事 開会あいさつ】

久元市長をはじめ、神戸市の幹部の皆様、神戸市会の安井議長、坊池副議長、並びに県会の小西議長、水田副議長にもお越しいただいている他、県議会の先生方にもご出席いただいた。お忙しい中、会議に出席いただき、改めて感謝申し上げる。

新型コロナの関係で、新規感染者数の増加が続いている。第８波に入っていくという状況で、新型コロナに加えインフルエンザとの同時流行も懸念されている。発熱外来の強化や様々な診療機関との連携も含めて準備を進めているところである。これから人の移動が増える年末年始を控え、更なる医療提供体制の強化が重要であり、これから神戸市とも連携しながら、しっかりと感染防止対策をやっていきたいと考えている。兵庫県では明日、対策本部会議の開催を予定しており、県民のみなさんへのメッセージの発出や医師会と連携した発熱外来の強化をしっかりやっていきたいと考えている。

さて 2025 年の大阪・関西万博まで２年余りになった。この間、「神戸空港の国際化」といった様々な問題が進んできており、神戸・兵庫にとっても大事な時期にきている。まずは万博に向けた気運を高めていくということが大事であり、その取り組みを本格化していきたいと考えている。「ひょうごフィールドパビリオン」ということで、県内各地で色々な取り組みや、震災からの復興 30 年と万博の年も重なる。2800 万人の観光客の出来るだけ多くの方々に兵庫・神戸に来て頂くために、地場産業や中小企業、農林水産業、SDGs をテーマにした色々な取り組みや展開を進めている。また、今朝、神戸市内にあるアシックスにも行かせて頂いた。スポーツと健康というのは大事な観点であり、今後も色々なコンテンツをこれからも増やしながら磨き上げていきたい。

かねてより久元市長も仰っているが、2025 年は瀬戸内国際芸術祭が開催される。兵庫県は関西圏と瀬戸内圏の結節点になり、兵庫県・神戸市にとって大事なエリアだと思う。兵庫津というのは昔から瀬戸内の中心であったという地の利を活かし、万博に合わせた SDGs も加えて大きな交流圏を作っていきたい。瀬戸内の芸術文化と自然の両方活かせる

のが兵庫県であるので、そういうこともやっていきたい。また、来年はＧ７サミットが広島で開催される。姫路城が世界遺産登録 30 周年であり、瀬戸内、関西の結節点である神戸・兵庫で震災からの創造的復興、ウクライナ情勢に対する平和等のコンセプトの提示も含めてやっていきたいと思っている。

SDGs の推進も大事なテーマである。先日の民間会社の発表によると兵庫県は積極的な SDGs 企業の割合が 49％で、全国では 45 位だった。特に中小企業・地場産業に SDGs を広げていかなければ、ヒト・モノ・投資が集まらない。特に若い世代が神戸や兵庫の企業に就職したくないということになりかねないので、大変危機感を持ってやっていきたい。そのためには経済界、特に神戸市内の地場産業や中小企業へのこれからの働き掛けをしっかりどのように個別に打ち込んでいくかということも大事なテーマだと考える。

今年は 11 月に天皇皇后両陛下のご臨席のもと、「第 41 回全国豊かな海づくり大会兵庫大会」を開催し、兵庫の豊かな海づくりが発信できた。かねてより久元市長が提示されている「ブルーカーボン」というテーマも含めて全国をリードする取り組みを広げていきたい。また、最近は有機農業への取り組みや関心が高まっている。「コウノトリ育む農法」を含めた「環境創造型農業」は神戸市にも多数の農地があるので、連携しながらやっていきたい。

本日は、コロナ対策を含めた色々な重要なテーマがあるので、限られた時間ではあるが、有意義な意見交換ができるよう、よろしくお願い申し上げる。

【久元市長 開会あいさつ】

齋藤知事、片山・服部両副知事をはじめ、兵庫県幹部の皆様、小西議長、水田副議長をはじめ、県議会の先生方には日頃から神戸市政へのご支援をいただいており、心から感謝を申し上げる。

今、齋藤知事が仰ったとおり、コロナとの戦いもこの年末年始は非常に大事な時期である。幸い、インフルエンザとの同時流行が顕著に起きているわけではないが、そういう恐れも考えながら緊張感を持って準備を進めていかなければならない。この年末年始の医療提供体制はしっかり神戸市独自の支援も行いながら準備をしているので、兵庫県からのご支援もよろしくお願いしたい。

今日の日経新聞にまさに齋藤知事が触れられた、瀬戸内の様々な取組が紹介されていた。兵庫県内では「高砂・姫路における水素の利活用、そして東に再び目を転ずれば」と言う書き出しで、神戸の水素サプライチェーンの構築などのプロジェクトが取り上げられていた。これは一例であるが、瀬戸内というものを視野に入れて、齋藤知事がお掲げになった瀬戸内芸術祭との連携案やクルーズなど非常に大きな視点に立って取り組むことは価値があると思う。

また、今年は関西３空港懇談会で兵庫県、県議会の先生方のご支援のおかげで神戸空港の国際化の道筋が付けられた。この関西３空港懇談会の記述のなかには、神戸市以西の新たな市場開拓等に積極的に取り組み、関西３空港の需要拡大に貢献するということが言われている。この陸海空の交通基盤を整備するなかで、神戸空港、大阪湾岸道路西伸部があり、この大阪湾岸道路が神戸西バイパス、そして播磨臨海地域道路と繋がるというような広域的なネットワークの形成に繋げていく必要がある。

さらに、港についてはカーボンニュートラルポートを進めていく。これは神戸港自身の国際的競争力を高めることにもなる。このような水素社会への取り組みはSDGsへの取り組みの一環である。SDGsという観点から言えば、知事が触れられた農業における持続可能性や有機農業を積極的に取り入れていくような取り組みが非常に重要である。農政分野、あるいはこの林業に対する取り組み、有害鳥獣対策や生物多様性というSDGsに含まれる分野については、兵庫県が専門的人材を擁しており非常に豊富な経験を有しているので、色々とご支援いただきたい。

2025年の大阪・関西万博については、神戸市としてもしっかり貢献し、また神戸経済の活性化に繋げていく必要がある。この点は今日の重要テーマとして兵庫県の考えも聞かせていただく貴重な機会だと思っている。神戸市の対応等も含めてご説明を申し上げ、本日は有意義な意見交換となるよう、どうぞよろしくお願い申し上げる。

【資料説明】
＜省　略＞

【意見交換】
（小西県議会議長）
私からは、協議事項２の大阪・関西万博に向けた取組の推進のうち、気運醸成に向けた取組の展開等と兵庫県域の大阪湾ベイエリアの活性化の２点について、発言をさせていただきたい。

まず、万博の気運醸成に関しては、開催まであと２年と半年程度となり、国内外から約2,800万人もの多くの人が訪れ、世界の注目を集めている大阪・関西万博は、兵庫に人・モノ・投資を呼び込む絶好の機会であると思っている。
万博を通じた経済波及効果、イノベーションの創出、地域の魅力発信にも大いに期待しているところである。
県が大阪・関西万博において出展する、本会場の県独自展示スペース「兵庫棟（仮称）」では、来場者が兵庫県に向かうきっかけを創出する体験を提供することとしている。また、県立美術館の「ギャラリー棟」は兵庫県各地へのゲートウェイとして、最先端技術などの各種のプログラムやイベント、また、様々な仕掛けによる展示や情報発信を計画している。
併せて、歴史も風土も異なる個性豊かな五国において、SDGsを体現する地域の活動現場を見て、学び、体験していただく「ひょうごフィールドパビリオン」も全県で展開される予定である。普遍性の高い本県の魅力を発信することで、万博後の兵庫県の更なる発展も期待している。
また、神戸市においては、神戸医療産業都市の整備により、健康や医療の分野のイノベーションを推進しておられ、「いのち輝く未来社会のデザイン」という万博のテーマに親和性が高い分野に注力されており、まさに本県が有する最先端の取組の１つである。
開催まで残された時間は短いが、県全体の万博に向けた機運醸成を図る一方で、開催に向けて、個々のコンテンツを磨き上げ、兵庫・神戸の魅力の向上、そして、それらの国内外への情報発信がしっかりと図られるよう、県・神戸市が密に連携し、取組を進めていただきたい。

続いて、ベイエリアの活性化については、大阪・関西万博を契機に、大阪湾ベイエリアの活性化に取り組む機運が高まっている。

県では、ベイエリア地域の強みや特色を活かしたビジョンを描くことで、官民連携による、従来のやり方に捕らわれない新しい発想・手法や地域の有機的な連携により、地域経済の浮揚を目指している。
また、県では、海上を通じた大きな人や物の流れを呼び込んでいくため、クルージングMICEや神戸・淡路島と万博会場を結ぶ航路など、ベイエリアへ誘客する海上交通の実証実験にも取り組んでいる。
神戸市域のベイエリアでは、例えば水族館アトアやフードコートができ、また、県立兵庫津ミュージアムも新たなスポットとなっている。また、万博の年は、阪神・淡路大震災から30周年となり、人と防災未来センターの先進的取組の発信も大切である。ベイエリア一体での魅力発信を更にしていけば、大きな人の流れを兵庫に呼び込むことができるのではないかと大いに期待している。
知事を会長、神戸市長を副会長とする「兵庫県域の大阪湾ベイエリア活性化推進協議会」においては、現在、ベイエリアの将来像や事業展開の方向性を示す「兵庫県域の大阪湾ベイエリア活性化基本方針」の策定に取り組まれており、今年度中に取りまとめられると聞いている。
そこで、万博開催に向けて、ベイエリアへの誘客や交流を活性化するとともに、万博後も、海上交通の実現も含め、人・モノ・投資を呼び込み、県内へ波及させるための斬新な取組や制度づくりについて、県と神戸市の連携によりしっかりと進めていただくように願っている。

（水田県議会副議長）
私からも２点申し上げたい。まず、１点目は、協議事項５の持続可能な地域環境の構築に向けた取組の中で、水素の社会実装に向けた連携推進についてである。
水素は脱炭素社会の切り札と言われている。

水素が日常生活や産業活動で普遍的に利用される水素社会を実現するためには、機運の醸成や水素エネルギーの普及促進を図る必要がある。
兵庫県は、ものづくり産業が集積していることから、そのポテンシャルを活かし、産学官連携の下、水素社会の先導的な地域となることが期待されている。
特に、神戸港は、世界初の液化水素の運搬実証の実績がある。また、私の地元である播磨臨海地域は、水素利活用のポテンシャルが大きいと見込まれているほか、カーボンニュートラルポートの取組が進められている。県は、２つの有望な水素サプライチェーンの拠点候補を有している。
また、水素社会の実現に向けては、水素モビリティの普及も不可欠であり、そのためには、水素ステーションの整備が重要となってくる。県・市協調での補助により整備を進めており、未実施の市町への積極的な働きかけなど、整備を加速していくことが必要であろうと思われる。
併せて、産学官による「ひょうご水素社会推進会議」や、「水素社会実装をめざす兵庫県自治体連絡協議会」等を通じた県内市町との連携により、水素社会に向けた機運醸成を図っていかなければならないと考える。
ついては、水素の利活用に向けた取組を加速させ、環境にやさしく、経済が好循環する地域社会の構築を県下一体となって目指していくためにも、神戸港、播磨臨海地域という県下でも先導的な地域を抱える県と神戸市が連携し、取組を進めていくようお願いする。
また、１月23日に「ひょうご水素社会推進シンポジウム」が県主催、神戸市と姫路市が共催で、姫路市において開催されるということも機運を醸成する上で期待をし

ているところである。

２点目は、協議事項２の大阪・関西万博に向けた取組の推進の中で、神戸空港の機能強化についてである。
神戸空港の国際化は、国際都市としての神戸市のブランド力を高めるとともに、インバウンド需要が回復基調にあり、本県の経済に大きな効果をもたらすことが期待される。また、神戸空港からの入国者が県内各地へ周遊したり、市民の海外渡航の利便が向上することにもつながる。
加えて、フライ＆クルーズが各地で実証されている中で、以前は神戸港に、クルーズ客船が年間 100 隻くらい入港していたと思うので、国際化される神戸空港と上手く連携していくことも期待されるところと認識している。よろしくお願いしたい。
また、神戸空港の新たな航空需要の拡大により、観光だけでなく、ビジネスでも利用されたり、外国・外資系企業の誘致を推進していくことにもつながる。さらに、神戸市以西の新たな航空需要を取り込むことが期待できる。
今後の国際化に向けては、国際便の運行に必要な施設整備の国への要望や、新たな航空需要の取り込み、インバウンド誘客施策などさまざまな課題について、県・神戸市が協調して取り組むことで、大きな効果が生まれると考えるので、継続して進めていただきたい。

（安井市会議長）
本日は、齋藤知事及び片山・服部両副知事をはじめ、県幹部の皆様、小西議長、水田副議長、また県議会の先生方、本当にありがとうございます。今日のお招きに対して、心から感謝申し上げる。
私は 45 年間、神戸市の市会議員として働いてきたが、今ほど県市協調が大切な時期はないと思っている。県と市が協調して、県の機関を長田区に持ってきていただいたことに、私どもは大いに感謝している。

話は飛ぶが、兵庫県というのは日本の中でも十指に入るほど力があり、また人口も多い。神戸市がその中の県庁所在地であるということに私たちは大変な誇りをもっている。特に神戸市会として、市長からも話があったが、「神戸空港の国際化」について大変な努力をしていただいたことに、心から感謝申し上げたい。神戸市会としても、今後、国際化、そして万博に備えてターミナルを改良していくため、24 年前に採択された、空港には税金を一切投入してはならないという決議を撤回し、税金を使って立派なものをつくっていくということにした。これに対して県の皆様方も大いに神戸を助けて頂きたいと思っている。

神戸はこの５、6 年で三宮都市改造、ウォーターフロント、六甲山、医療産業都市といった、あらゆる面で非常に新しい大きなステージに上がろうとしている。私の経験上、神戸が一番輝いたのはポートピア 81 の年だったが、これから新しいステージで「カムバック神戸」と言えるのではないかと思う。良い知事、良い市長を長く使うということは議会の知恵でもあり、市民・県民の知恵でもある。そういう意味では、県市が協調しながらやっていくということを考えながら、この神戸が新しいステージに立つことに皆さんのご協力をお願いしたい。

特にウォーターフロントに関しては先般も神戸税関長を議会に招き勉強会を行った。新しいヨットハーバー、世界に向けてのヨットハーバーにヨットやクルーザーで来られた方

がそのまま税関を通過したり、チャーターで神戸空港に来て、瀬戸内クルーズをするというような仕掛けをしていきたい。また、先ほど話題に出た水素や、神戸の顔と言うべき元町の再開発を含めて三宮再開発にご厚情いただければありがたい。

（坊池市会副議長）

本日は、兵庫県会、神戸市会の代表者参加の上で、今後の兵庫県・神戸市の発展のために協議できることは非常に有意義だと感じている。齋藤知事をはじめ、県の幹部の皆様、県議会の皆様に感謝を申し上げる次第である。

私からは、２点申し上げる。まず協議事項５「持続可能な農業の推進」についてである。神戸市ではSDGsの取り組みの一つとして、農業生産において必要不可欠な肥料の１つである「リン」を下水や汚泥から回収し「こうべハーベスト」として肥料の利活用を進めている。国際情勢が混迷を極め、化学肥料などの生産資材価格の高騰や高止まりなど甚大な影響を受けているなかで、下水・汚泥由来の「再生リン」の生産および利用を市内から県内、そして全国に拡大することで、持続可能な循環型の農業を進めていくことが可能になる。兵庫県におかれては、「こうべ再生リン」を活用した肥料の利用拡大に向け、今後協力をお願いしたい。

次に協議事項６の「神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会」についてである。東京パラリンピックに続き、本大会を東アジアで初めて開催することは、パラスポーツの普及に加え、障害や多様性への理解を深めインクルーシブな社会を実現する契機となる。障害や多様性への理解・促進に向けてできるだけ多くの方が大会を観戦し、感動を共有していただくためにも、兵庫県・神戸市で協調し、県下の開催気運の醸成を図っていただきたいと考えている。

（久元市長）

この「ひょうごフィールドパビリオン」がどういうものなのか、できるだけ分かりやすく具体的に教えてほしい。

（梶本企画部長）

ひょうごフィールドパビリオンは、大阪・関西万博に来られた皆さまを兵庫県内へいざなうための、私どもの大きな施策の一つとご理解いただきたい。パビリオンというと仮設の建物を作るように思われている方もいるが、「ひょうごフィールドパビリオン」とは全県（県土全体）をパビリオン（会場）と見立て、そこに多くの方に来ていただく。１つ１つのパビリオンのイメージは、例えば地場産業、農業、伝統文化などそれぞれの現場等、色々な風土に根ざした取り組みや、知恵を持ってこれまで継続してこられた現場の営みの中にこそ将来の地域に繋ぐ、あるいは世界のSDGsの課題に貢献するような知恵がおそらくそこに眠っているだろうということで、地域の人たちにその意義や価値をしっかりと紡ぎだし、その人たちの言葉で伝えていただこうと考えている。

現在は各地域からフィールドパビリオンに手を上げていただく作業をしているところである。色々な人たちに足を運んでいただいて、そこの地域で学び、体験し、感動していただきたい。そして、次の地域づくり、または地域の持続性、もっと広く言うと、いま世界でSDGsが課題であるが、「SDGsへの貢献の知恵がある」ということを体感できるような場にしたいと思っている。

理解しにくいというであれば、各地で行われている「オープンファクトリー」等の取り組みを例にしてほしい。そこの地域の人たち自身が、自らの取り組みに再度光を当て、そ

の中に価値やストーリーを見出し発信していく。そのようなオープンXだと思っていただきたい。私たちはどうすればそのような取り組みをみなさんにご理解をいただけるか、そして訪れるだけの魅力を磨き上げることができるかということを県として、伴走型で色々な専門家の知恵も入れながら、磨き上げていきたいというのが一つ。ただ、その魅力を世界や日本中に発信する事はやはり難しいため、国内・海外にその魅力をしっかりとプロモーションするという部分について私ども県がしっかり尽力していきたいと考えている。万博期間中は、そのような情報を来場者に伝えるために、関西広域連合パビリオンの中にある兵庫棟(仮称)や県立美術館のギャラリー棟で情報発信をしていくことで、ヒトの流れを呼び起こしていきたいと考えている。できれば、私たちの思いとしては、来られる人々を通じて地域の中にヒトと経済の循環をしっかり作っていきたい。平たく言うと「しっかりとお金が落ちるような仕組みを作る」ことで地域の持続性に繋げて、万博が終わった後にもそういったところが回っていくようにしたいと思っている。

（久元市長）
　そうすると、万博会場の関西広域連合のパビリオンと兵庫県立美術館が会場になるということか。

（梶本企画部長）
　万博会場の関西広域連合のパビリオンと兵庫県立美術館は、情報発信の拠点である。「ひょうごフィールドパビリオン」の現場は兵庫県内の各地にあると思っていただきたい。

（久元市長）
　神戸市から提案は出ているのか。

（齋藤知事）
　神戸市も結構何件か出ている。このフィールドパビリオンというのは、実は私が知事になる前の大阪府にいたときから万博の機会が兵庫にとって大事だと思っていた。民間のみなさんと一緒になり、このような「ひょうごフィールドパビリオン」みたいな構想を考えていた。ある方が「フィールドパビリオンというのをやったらどうだ」と提案してくれた。これの背景は、今回の大阪・関西万博の会場というのが、前回のドバイ万博と比べると３分の１くらいの規模の大きさなので、来訪者が万博の会場だけでなく、会場外にも滲みだしてくるだろうという見立てをしている。それをぜひ兵庫県が取り込んでいきたいという大きな狙いのもとに、コンセプトを設計した。行政が主体となって箱モノを作るというより、民間の取り組みを主体としている。取り組みの現場そのものに行っていただきたいというようコンセプトにしており、SDGsや人材型復興、地場産業や農林水産業の新しい取り組み等をテーマにしている。そこに来ていただいて、見たり場合によっては食べたり味わったあとにディスカッションすると言うような場を各地に点在させていく。これを有機的に何らかのかたちで結び、それを万博の会場から繋いでいくということにチャレンジしたいと思っている。例えば、神戸市内で言うと福寿の「さかばやし」がある。CO2を排出しないエコゼロなど地場産業にSDGsを取り入れて、非常に伝統的な「お酒づくり」の世界に新しいコンセプトを入れていこうとチャレンジされている。酒造りの現場をパビリオンと見立てていく。観光客の方、外国人の方とか万博の後にアフターで来ていただき、そこで体験し味わっていただき、そして議論をし、その後ファンになっていただく。そのような「点」を広げているところである。

（久元市長）
だいぶん理解できた。

（齋藤知事）
これは、結構難しいチャレンジだと思っている。上手く行くかどうかはやりながら判断していく。県や市を使って万博イベントということをやると、一つの一過性のものはできるが、ただ、私は万博後のレガシーとして色々なものが繋がっていくということをやりたいと考えており、今回、全県でフィールドパビリオンを展開するというコンセプトにした。

（小西県議会議長）
県も神戸市も環境創造型農業・オーガニックの農業を進めているという話だが、これからの農業分野においては本当に取り組んでいかなければならないと私たちも思っており、その価値というのはしっかりと高めていかなければならない。しかし、私は丹波篠山市出身のため、オーガニックという有機農業と無農薬の違いは、言葉とかイメージだけが独り歩きをしていないかと思ってしまう。
現在の農業生産高や効率性というのは化学肥料など、機械も含めた進歩のうえに今の生産量があるので、無農薬やオーガニックの分野に入っていくと、SDGs自体がそうだが、少し逆戻りする部分がある。いろいろな生活・住環境に対して臭いの問題や例えば野焼きをして、すごく怒られたりすることなども考えられる。堆肥をペレット化するなど新たな技術をしっかりやっていくことと、消費者の意識を高めて、意義をしっかりと伝えていくという二面性をやらなくてはいけない。
皆さん一定は、「オーガニック良いですね」となるが、それを作っていく土づくりは３年かかることや、臭いが出ること、曲がった野菜ができること、虫が食べている部分があること等もしっかり受け入れられる市民・県民でなければ、本当の意味のオーガニックやSDGsの農業というのはなかなか実現できないのではないか。そういう意味では、堆肥のペレット化等の技術の向上と市民への啓発を両方向で進めていく必要があると考える。
兵庫県の農業というのは山奥の広いところではなく、住環境に近いところでやっているので、機械化や労働力の軽減等も含めて、協調しながら、特に神戸市で成功例を作っていただきたいと思う。

（久元市長）
令和５年度の神戸市当初予算において、今まで有機農業は本格的に取り組んだことはなかったが、ぜひこれに取り組みたいということになった。その際、事業先行型ではなく、まさに小西議長が言われた「有機農業とは何なのか」、「何を産み出すのか」ということと、正確な定義といったコンセプトをはっきりさせたうえで、具体的な施策の展開をしっかりやらなくてはいけないと感じた。

（安井市会議長）
先ほど申し上げた神戸市会でも問題になっている元町駅の再整備についてお伺いしたい。県庁の再整備についてはいったん凍結されたと聞いている。当局の事務方とも協議されていると思うが、知事の見解として神戸の顔となり、県の顔ともなるＪＲ元町駅を中心とした再開発のスケジュールや考え方について聞きたい。

（齋藤知事）
元町駅周辺のまちづくりをどのようにしていくかというビジョンの方向性と県庁舎のあり方をどうするかという２つの問題がある。まず、以前まとめた県庁舎の再整備の計画に

ついては700億円以上かかるということで、これをそのまま進めた場合、恐らく今の資材単価の高騰で1,000億円、場合によっては2,000億円近い事業費になっていたかもしれない。そうすると財政が厳しい中で、場合によってはほかの事業がストップせざるを得ない事態になっていたかもしれないので、元々の計画をストップしたことについては一定の合理性があり、やむを得ない判断だったと私自身は思っており、そこはしっかりご理解いただきながら丁寧に説明していきたいと考えている。

まずは県庁舎の耐震性への指摘もやはり強くある。実際、1号館は耐震化がなかなか厳しいという状況である。まずは既存の1号館、2号館を含めた今の県庁の働くあり方を安心安全な形に、至急どのようにやっていくかということを今年度から進めている。今日の神戸新聞にも出ていたが、業務のデジタル化・ペーパーレス化を進めながら、抜本的に庁舎の在り方について今年度末から検討をスタートしていきたいと思っている。その上で、県庁舎の整備について議論していきつつ、その一方で、元町駅周辺についてどのようにまちづくりをしていくかというのは、まさにこれからの議論になる。ここについても以前から議論していたものをベースにしながら、どのようにブラッシュアップしていくかということを考えていきたい。大事なのは元町駅周辺をどうするかということで、やはりバリアフリー化であり、元町駅西側の階段を含め、地元の方や障害をお持ちの方の団体からの要望が非常に強い。ここは以前、恐らく実務的にも県と神戸市で何度か議論を積み上げたものがあるということで、それをブラッシュアップしていき、元町駅周辺のバリアフリー化を含めたことをどうすべきかについては、早急にスピード感を上げて、場合によっては切り分けてしっかり議論していきたい。

（安井市会議長）

事情はよく理解している。ただ、神戸市は旧六大都市として、また府県においても24番目で25番目が沖縄県。そういった十指に入る県と神戸市が協力すれば非常にユニークな都市づくりができることは間違いない。そういう意味では、いま兵庫県で育てていただいた長男が大きくなろうとして、次のステップに上がろうとしているときである。この時こそ県市協調のなかでコンセプトをしっかりと語り合いながらやっていただけると神戸市会としても非常にありがたいと思っている。

（齋藤知事）

有機農業の関係については小西議長、それから久元市長がおっしゃった面がすごく大事である。来年度は我々としても有機農業を含む環境創造型農業をもう一度改めて議論して、体系的にどのように進めていくかということで検討会を立ち上げることにしている。有機農業は非常に定義が大きくて多様なものであり、兵庫県での「コウノトリ育む農法」は、海外でも人気が出てきている農業でもある。そのようなものも、色々なやり方があると思うが、どのように県全体で展開していくかといった切り口も含めて検討していきたい。

一方で、提案のなかにあった下水汚泥を活用した「こうべハーベスト」について、私自身も非常に大事な取組だと思っている。小西議長の発言にもあった多少虫が食べてても、形が変わってても食べるということで、消費者側が有機農業を理解するというのが大事である。そのような観点からもぜひ我々が有機農業を含む環境創造型農業に関する検討会を開く際には、ぜひ神戸市にも参画、場合によっては連携をお願いしたい。

（久元市長）

ご説明いただいたように「こうべ再生リン」は有機肥料ではなく、化成肥料になる。ただ、環境創造型農業という観点から見れば、これは有機ではないが、非常に意味がある循環型肥料であるので、これを広げていくということをぜひ兵庫県でも必要な支援をいただ

きたい。神戸市では職員向けセミナーを行っているが、その中で「フードロスをどう防ぐのか、減らすのか」ということが出た。まさに小西議長が仰っている、曲がっているキュウリや、ちょっと虫が食べているようなものについては、消費者の間でこれらに対する抵抗感というものが大分なくなってきつつある。これはある意味で有機農業に対する追い風になるかもしれない。そのような消費者マインドをしっかり掴みながら進めていくということが大事だと考える。引き続き担当部局同士、意見交換をさせていただきながら、同じ方向性で進めていければと思う。